

# パセリーうどんこ病の発生状況と防除

九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部 小 板 橋 基 夫

## はじめに

パセリー (*Petroselinum crispum* Nym.) は極めて利用頻度の高いハーブで、家庭菜園を含めて日本各地で生産されている。我が国におけるパセリーうどんこ病は1989年に初発生が報告された。本病は商品として流通する葉や葉柄に発病するため、わずかな発生でも大きな被害となる。初発生が確認された後、本病の発生は拡大していると考えられるが、現在までのところ本病に対するパセリー品種の抵抗性差異や薬剤防除に関する知見はほとんど得られていない。また、病原菌のセリ科植物に対する病原性はニンジンとヤブジラミ以外は明らかでない。そこで筆者の行ったパセリーうどんこ病に関する試験結果を紹介し、今後の参考に供したい。

## I 発生状況

### 1 病徴と発生様相

本病菌の菌叢は表生して永続性であり、葉や茎の表裏両面に白い粉状の斑点として生じる。菌叢は展開中の新葉よりも展開後の成葉に現れ、発病が進むと株全体が白くなり被害が著しい (図-1)。盛んに生育している上位部よりも、実際に収穫する下位部の発生が多く被害が大きい。福岡県久留米市周辺の圃場では春から発生し始め



図-1 圃場におけるパセリーうどんこ病の発生

まん延して激しい被害が生じる。久留米市周辺のパセリー一農家は自家採種を行っているが、開花結実時に各部位に激しく発病して植物体を衰弱させ問題となる。盛夏には発生は治まるが、秋には再度発生する。

### 2 分布状況

我が国におけるパセリーうどんこ病の初発生は1983年に香川県において確認された (都崎・十河, 1989)。その後、佐藤は埼玉県と千葉県での発生を確認している (佐藤, 1999)。筆者は1998年に福岡県における本病の発生を確認しており (小板橋, 1998)、現在はかなりの広範囲で発生していると考えられる。また、暖地における冬春パセリーや高冷地における夏パセリーいずれの作型にも本病が発生し、問題となっている。

## II 病原菌の特徴

本試験を通じて供試した菌株は、2001年10月に福岡県久留米市の施設圃場の「パンチ・パセリー」に発生したうどんこ病の病斑部から後述の手法で単孢子分離したものをを用いた。1989年の都崎・十河の報告では本病菌の分生子や発芽管の形態で病原菌を *Erysiphe heraclei* DC. と推測している。今回分離されたうどんこ病菌の形態を図-2に示した。また、平田 (1942, 1955) の方法に準じて発芽管の形態を観察した (図-3)。本病菌と都崎・十河の報告ならびに我孫子 (1976) によるニンジンうどんこ病菌 *E. heraclei* の比較を表-1に示した。久留米で発生した本病菌の分生子の大きさと形態は都崎・十河の

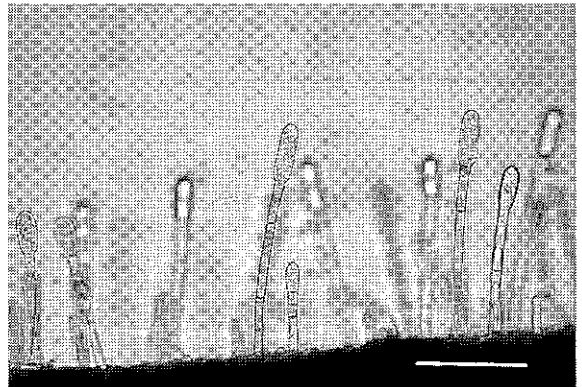


図-2 パセリーうどんこ病菌の分生子と分生子柄  
バーは100 μm.

Ecology and Control of Powdery Mildew of Parsley Caused by *Oidium* sp. By Motoo KOITABASHI  
(キーワード: パセリー, うどんこ病, *Oidium* sp., セリ科植物)